

定年退官という残酷

——山崎豊子『白い巨塔』にみる東貞蔵教授の胸中

徳永 光展

一 はじめに

嫉妬は俊秀の才能を脅かす場合がある。この様子は『白い巨塔』においては、浪速大学医学部第一外科主任教授である東貞蔵の助教授・財前五郎に対する態度に様々な形で見出すことができる。東は、上司・部下という上下関係に基づく秩序が財前の卓越した能力の前に潰されかねない危機に耐えられず、後任教授として自らの影響力を残し得る人材を浪速大学以外に求めようとする。その様子からは、社会の奥深くに潜む縦の人間関係こそ遵守されなければならないという強固な価値観、また優秀な部下を必ずしも認めたがらない風潮が見て取れるのである。本稿では、教授という権力の座に執着し続ける東に焦点を当て、その胸中を分析することに主眼を置きつつ、後任人事に介入し、自らの影響力を末長く残そうと躍起になる様子についても考察を加えようとするものである。

る。

二 純血主義の医局

『白い巨塔』では、大学の医局内における人間群像が様々な描かれている。その頂点をなす教授の心境を分析してみると、勝者として解されがちな彼らの胸中にも「しがらみと自己の将来、損得が複雑に絡んで」いる事実がうかがえる。

「余裕と威厳」（6・二四頁）に価値を見出しつつ、浪速大学医学部第一外科を預かる東貞蔵教授は典型的なそのひとりである。彼は東京にある東都大学を卒業し、同学助教授から大阪の浪速大学教授に転じている。赴任当時は母校で教授になれなかったことを「終生の痛恨事に思い、暫く思いきれずにいた」（6・一五頁）ほど悔いたが、その後、大阪の地にも馴染み、教授として第一外科を率いてきた。医学部長・鶴飼教授と文部省に浪速大学医学部新館増設の運動をし、それが

かなって落成を待つ頃、残り少なくなった退職までの日々に思いを馳せる。

ところで、状況設定から判断していくと、読者は、この作品に登場する浪速大学が大阪大学²、対する東都大学が東京大学を指していると理解したくなる。いずれもかつての帝国大学であり、戦前からスタッフを自校卒業生で固める人事傾向が極めて強いのが特徴である。よって、東は東都大学という最高学府を卒業したが、母校では教授になれない事情があり、浪速大学に教授として赴任したという解釈に落ち着いてくるのである。ところが、浪速大学医学部は教員の自給率が極めて高く、同窓意識や東京に負けない実績を上げようとする反骨精神も強かったため、東は時に宙に浮かざるを得ず、その疎外感と闘いながら、学部長に取り入って、うまく学内を泳いできたと捉えられてくる訳なのである。

次に、医局という組織について、略述しておきたい。当時の日本における大学医学部は、科毎に教授が一名、助教授が一名、講師が二名、それに有給助手数名と無給助手数名、残りは博士号取得を目指す大学院生や医員で構成される医局が診察単位を形成していた。外科だと、浪速大学の場合は第一外科と第二外科が存在し、相互が補完的に機能して、あらゆる種類の外科患者に対応する仕組みとなっている。医局から関連病院へ大学を卒業し、国家試験に合格して医師免許を取

得した医師を派遣したり、関連病院からは自前では治療の困難な患者を大学病院に紹介するなどといった形で、両者は深く結び付く。関連病院といった場合、例えば浪速大学第一外科の関連病院というような表現はごく普通に行われるが、このケースを例にすると、浪速大学第一外科の卒業生が勤務している病院という意味合いで使用されている。ちなみに、浪速大学第一外科は「五十人余りもの人員をかかえる医局」(6・一三頁) だと言う。

現在でこそ、医局に他大学を卒業した若い医師が入局するケースは多々あり、珍しいことでは決してなくなっているが、この作品が発表され始めた当初(一九六三年頃)には、卒業した大学の勢力下から抜け出て他大学の勢力下に入るとなると、裏切りの誹りを免れず、医師たちは出身大学の教授を頂点とする縦の人間関係に束縛されざるを得なかった³。後に裁判で浪速大学に不利な証言をした柳沢弘医師は東の率いることとなる近畿労災病院への就職を斡旋しようとする里見脩二医師の誘いを固辞して、「四国の高知県梹原にある松原地区の無医村へ行く」(8・六三四頁) 決心をしたが、このケースなどは出身校の医局と絶縁し、学閥の恩恵を生涯得られないという点で医学界における昇進の道を途絶する人生を選択したことになるのである。

三 医局主宰者としての教授の威厳

当時の国立大学における教授の定年は六十三歳であったが、悠々自適の生活を待ち望むなど、東には考えられなかった。六十三歳になって、突然に働くことを停止させられ、教授という肩書を剥奪される姿を想像すると、寂寞感に打ちひしがれない訳にはいかなくなる。

その感情は、東が第一外科で辣腕をふるっていた頃から、無意識下に潜んでいた感情であったと考えられる。彼の下にいる財前五郎助教授が噴門癌手術において傑出した力量を誇るまでに成長してくると、東は自らの立場を脅かす存在として財前を敵対視する気持ちがかみ上げてくるのである。配下で使い続けてきた人物が、自らを追い抜かんとしている状況に思いを馳せた時、東は手塩にかけてきた後学の成長を喜びという気持ちにはなれず、「激しい動揺を覚え」（6・五二頁）、嫉妬の念に駆られ出すのである。

一例を挙げれば、東の出張中に、財前が週刊誌の記者からの取材申し込みを受け、手術の様子を撮影させる出来事が生じている。その上で、記事にすることを許諾したので、東が不快極まりない思いをするというところから作品は始まっている。東は本来、自らが教授として教室の看板になるべきであるという誇りを傷つけられたような感を強くし、激しく感

情を揺さぶられる。知らない間に財前が「学問的にも社会的にも、自分の競争者に」（6・五二頁）なり、自らを追い越すまでに大きく成長してしまっている様子を感じ取らずにはいられなかったからこそ、東は第一外科医局の代表者としての面子が潰されたような気分を味わったに違いない。

東にしてみれば、定年退官した後も、自らを師として仰ぎ続ける存在が後を引き継いでくれ、東が教室に対して変わらぬ影響力を保持し続けたいという思いを汲んでくれる人物を後継の教授として選出したいという止み難い感情が頭をもたげてくるのが自然な成り行きであった。そこには、美しく、潔く、引き際を見極めるという発想はなく、逆に、いつまでも既得権を行使し続けたいという欲望を読み取ることができ

る。そのように考えてくると、東が鶴飼学部長を呼び出し、後任人事についての相談を切り出す（6・二五頁）のは自然な成り行きであった。東は財前が自らの出張中に週刊誌からの取材を受け、グラビアを手術姿で飾る行動を取ったことを理由に、財前を「ちよいちよい、妙なスタンド・プレーをやる」（6・二四頁）出しゃばりと決め付けようとする。その上で、後任に移入教授を考えている旨を鶴飼に切り出す。財前を切って、退官後もリモート・コントロールの効く人材を教授に据えるべきかどうかで東は煩悶する。なぜならば、学内

には浪速大学の純血で東の下にずっと仕えてきた財前こそ次期教授に相応しいとみる雰囲気も少なくなかったため、東の独断で人事を動かすことが難しかったからである。

財前を次期教授に据えれば、医局は発展するだろうが、東は蚊帳の外に置かれるに違いないという見方は鵜飼に「財前が教授の椅子につけば、あれほどの奴のことだから、君の思い通りにはなりそうではないね」（6・二五頁）と指摘されるまでもなく、東自身も熟知するところであつた。そのように突き詰めた時、財前以外の者を外部から移入するという作戦が俄かに現実味を帯びてくる。

四 移入教授供給源としての東都大学

移入するとすれば、浪速大学出身の他学教授を呼び戻すか、或いは全く別系統の学閥に人材を求めるかが争点となるが、東は自らの出身にこだわらざるを得なかつた。浪速大学の自校閥が強固に築き上げられた学内で、東は東都大学という最高学府出身であるという誇りと同時に外様大名でもあるかのような寂寞感に苛まれる機会にも巡りあわずにはいられなかつた。その中で、学部長の鵜飼をはじめ、浪速大学の主流派ともうまく付き合ひ、孤立せずに学内を泳ぎ切つてきたという自負もまた存在していたのである。だから、浪速大学閥で固められた学内に外部から教授を移入するという発想が頭

を駆け巡つた瞬間、その供給源としては自らと同じく東都大学出身者を想定してしまう。東都大学出身という好で繋がるうとする東の胸中を考えると、経歴を同じくするからこそ、分かり合えるに違いないとの思い込みがうかがえる。その結果として、東都大学の船尾教授に後任者の推薦を依頼するという手段に出るのである。

船尾は東の後輩であつたが、東都大学教授という肩書や学界等における影響力という面では東もひれ伏さなくてはならない存在であつた。東にしてみれば、船尾の門下に浪速大学教授という餌を与え、それと引き換えに自らは定年後も第一外科のOBとして安住でき、浪速大学にも口を挟める地位を得たいとの作戦を読み取ることができるのである。

船尾が推薦してきた新潟大学の亀井教授と金沢大学の菊川教授は、甲乙つけ難い俊秀であつた。船尾から送られてきた両者の履歴書等一式を政子に見せる東は、困難な判断を妻に委ねたかのようにも解釈できる。政子は菊川が妻を亡くし、子供もないという事実を知るに及んで、浪速大学教授としてのみならず、娘の佐枝子の婿としても、ぜひ菊川を選ぶべきだと主張して憚らない（6・一九四頁）。政子の強引さに引きずられるようにして東は、人が人を選ぶという人事なる行為は所詮、こうした実力外の要素で決まるものなのだ、「人間が人間の能力を査定し、一人の人間の生涯をきめる人事その

ものが、突き詰めてみれば必ずしも妥当ではない、残酷な、そして滑稽な人間喜劇なんだ——」（6・一九四頁）と悟られるようになるのであった。そうして、船尾に菊川を紹介してもらった手前、どうしても菊川を教授選で勝たせなければならぬと考える。万が一、菊川が敗れるようなことにでもなれば、船尾が激怒し、自分の再就職先人事にも介入し、妨害工作を働かせるかもしれないという妄想に駆られ出すのである。その背景には、東が退官を機に失墜してしまうかもしれないという恐怖感に襲われているという事情があつた事實は想像にかたくない。

五 私事も絡む憂鬱

東は定年退官後における身の振り方を考えると、憂鬱な思いに捉われるはずなのであった。歴代の教授は退官後、地域における中核病院の院長など相応の地位に天下りしていくが、第三内科の石山教授のように鉄道病院の院長になれず（6・一四七頁）、企業の顧問医になり下がる例もあり（6・一四八頁）、決して予断を許さない。その意味では、財界の経済人や政治家への根回しを怠ることなくまめにこなし、退官後の行き場を確保する必要が東にはあつた。相応の地位、相応の収入、現役教授時代と比べても遜色のない社会的立場を維持できるかどうか、東の心理的安定には不可欠だった

のである。定年という瞬間には、浪速大学名誉教授という肩書が残るだけで、後の進路は自分で切り開いていかなければならないとあつては、胸中穏やかならぬ日々を余儀なくされるのもやむを得ない。

しかしながら、妻の政子は、「発癌研究の班会議など几帳面に出席している」（6・一四八頁）夫が肝心の再就職先を求めて奔走しているような気配を家庭では見せていないので気が気でない。浪速大学医学部教授夫人の親睦会であるくない会の会合で、臨床の教授夫人が「在官中も、退官後も、実力だけではどうにもならない問題が多々ございますわね、強力な政治力や、つてを持つておられる教授は、そう実力をお持ちでなくとも、官公立病院の院長や、武丸製薬や平和製薬のような大製薬会社の顧問として、顧問料、月十万円ぐらいお取りになれます」（6・一四八頁）と話すなど、定年退官となつた教授の再就職先が話題に上らないことはないとなつては、政子も興奮してくるのである。結婚適齢期にある娘の佐枝子を夫の地位が安定している状態で嫁がせたいと考える政子は、東が退官後、相応の病院に勤務してくれることを念願してやまないでいる。政子は煮え切らない東の家庭内での様子から、つい感情的になり、「普通、国立大学の教授の退官後の行き先と言えば、Aクラスは、東京でいえば国立東京病院、大阪近辺では国立関西病院、厚生年金病院、近畿労災

病院の院長といったところで、それ以外は、Bクラスになつてしまうのよ」(7・二六―二七頁)と娘には応じ、また夫には「さつきから、何度もお声をかけていますのに、退官なされると、そんなに急に耳まで遠くおなりになるのですか、今からそんなことでは、先が思いやられますわ」(7・二五頁)と詰め寄って、退職後の身の振り方を考えているのかと言わんばかりの態度に出るのである。

政子の手前、佐枝子の手前、浪速大学関係者への手前、そして何よりも自分自身の心中を安定させるためには、東はじつとしてゐるわけにはいかなかった。船尾を介して菊川と面識を得ると、「あなたは、浪速大学へ来て、現在以上に完備した研究施設と、潤沢な研究費を得て、さらに優れた学問的業績を上げられることですよ」(6・二五八頁)と言つて、自らの後任人事にぜひ応募してほしいと嘆願するのであった。菊川は、静かに研究に専念できるような場所を求めて東都大学から金沢大学に転出した学究であったが、船尾、東の両者から強い要請を受けると、出馬を受けざるを得なくなる。船尾は東都大学閥の拡大、東は浪速大学における発言力の保持、相応の再就職先確保に加えて、愛娘・佐枝子の夫の獲得、いずれをとつても菊川のためと外見は装いながら、実際には両者が自らの利権を追求した結果として提案された人事案件であり、当の菊川本人は二の次にして事が運ばれていったの

である。

この展開を分析すると、東は一方では財前を部下として使えるだけ使い、退職後には安易に見殺しにしてしまつて平気であるということ、また、菊川を後任に据えることで、船尾に貸しを作ることができ、老後の展開を有利にすることに終始していると考えられること、これらの点において自己中心の発想の塊であると見なすより他にない。そのような姿勢は佐枝子には見抜かれてしまつており、その結果として、彼女の縁談がまとまらないのだと娘に反撃されるのである。佐枝子にしてみれば、「家庭で話される話題は、大学内における父の地位と業績であり、それに関連する医学部内の人事の話であり、すべてが権力と名誉欲と利己主義に満ちていた」(6・三八頁)様子に対する違和感が確実に根差していたのである。

東は佐枝子の結婚相手として、大学病院に勤務する医学者以外には考えられずにいる。また、夭逝した長男は中国文学を専攻したがつつが、東は断固として許さなかったともいう。無理を重ねた理系の受験勉強の末、やつとのことで新潟医科大学に入学したものの、「胸を病み、戦時中の食糧不足が加わつて二十二歳で夭逝した」(6・四〇頁)兄への郷愁も佐枝子を父への批判へと駆り立てていとと解釈できよう⁵。

六 失敗した工作

東は財前が菊川に加えて、徳島大学教授で東門下の葛西博士を交えた教授選に僅差で勝利するという結果に呆然とする。船尾が「まさか、内定している東のポストまで覆そうとするほど執念深くはないであろうとは思いながらも、もしかしたら、菊川落選の激怒のあまり、自分の行き先を妨害すべく動き出しているのではという不安」（7・二四頁）にも東はおのきながら、内定しかけた近畿労災病院院長の辞令が病院竣工の遅れからなかなか下りない状態に失意と恐怖の日々を過ごす。終日在宅し、呆然としたかのように張りあいのない様子に政子も佐枝子も啞然とするが、教授という地位によって自己を支えられてきた人間が、任期満了と共にすべてを失ったかのような気持ちになる様子への想像力を家族が持つことが求められていたのであろう。佐枝子は血の繋がった娘として「お父さまはごりつばにお仕事をすまされたのですわ」（7・二六頁）と述べているように、父の胸中を洞察する目を持っているが、妻の政子は「問題は、退官後の行き先ですよ、これは自分自身の力で決めることですからね、それをお父さまは、積極的にご自分から動くとはなさらないから、とつくに内定していた近畿労災病院の院長の椅子さえ、何だか、あやふやになって来そうなのよ」（7・二六頁）と娘に返

し、単なる怠惰としてしか夫の言動を受け取ろうとしない。

在職中は毎年年初の挨拶に自宅まで足を運ぶなど、東にひれ伏していた財前は、教授昇格後は、足を遠ざけていった。それもまた、利害でのみ繋がっていた両者の関係性を雄弁に物語っている。東は「確かにメスを持たせれば腕だけは抜群だが、人間的にはあの通り功名心が強く、僕自身の恥を云うようだが、腕は仕込めたが、人間的にまでは仕込めなかったということですよ」（6・二二頁）と言う。つまり、財前に外科学は伝授できたが、医療従事者として必要不可欠な人格は仕込めなかったとして財前に軽蔑の眼差しを向けようとするが、それも根本まで遡って考えてみると、師匠であった東自身が自己保身的発想で凝り固まっていた結果として生じた帰結ではなかったか。なぜならば、それを身近で見続けてきた後継者・財前は、知らず知らずのうちに前任者・東を通して内に自らなりの教授像を育んでいったと考えられるからに他ならない。

七 財前と里見

父を批判する佐枝子は、密やかに高校時代の同級生、里見三知代の夫で浪速大学第一内科助教授の里見脩二を思慕するようになっている。里見は財前と同級生で、しかも病理学教室の大河内教授から学位を得た点までは共通する履歴である

が、研究指向の里見と権力指向の財前は水と油の如く噛み合わず、お互いがお互いを批判する立場で描かれている。

財前は、学位取得後すぐに臨床に移って、教授選、外遊、学術会議選挙出馬と華々しく活動し、診療にあつては特診患者を特に優遇し、一般保険患者を見下すなど、権力指向を前面に押し出している。昇格のための教授選では、当選するためには手段を選ばずといった態度で、養子先の義理の父である財前又一の入れ知恵に基づき、裏金を浪速大学医学部の教授たちにばらまいていく。辛くも、船尾・東という東都大学ラインが推薦した金沢大学の菊川を抑えて、教授選に打ち勝つや否や、国際外科学会からの招きによりハイデルベルク大学で開催された同学会の消化器部会に参加するという褒美に飛びつくのである。ここでは、ヨーロッパ各国から集った研究者を前にして、ドイツ語による口頭発表を行っているが、ドイツ語原稿のチェックを医局員にさせる際には「食道・胃吻合術の日本における代表者として招聘され、発表する論文だから、そこには自ら文学的表現が必要となつて来る」（7・一一五頁）などと気取っており、国際外科学会からの招聘に有頂天になっている様子もよくうかがえる。また、ヨーロッパ外遊における財前は、昇格を祝う凱旋の日程をこなしているのかのようであり、人生における栄光の頂点を勝ち取ったかのような自信に満ちた言動を周囲に対して見せつけてもい

る。この作品においてヨーロッパにおける財前の成功が強調される背景には、ヨーロッパが一九六〇年代の日本にとつて手の届かない先進諸国として意識されていた事実があると考えられる。同時に、財前がヨーロッパ人を凌駕した自己に酔いしれたり、その文化を侮ったりしている様子からは、自己の優越性を信じ切りたいという彼の欲望を暴き出すことができる。一方、私生活にあつても夙川に豪邸を構え、妻・杏子の実家から潤沢な経済的援助を得、派手な振る舞いが目立つてもいるのである。

そのような財前に対して、批判者のように立ち現われているのが、里見だった。「臨床より病理の方が好きだから病理学教室に入」（6・八五頁）ったものの、待合室に群がる患者を見かね、「生命を守りたいという希いに駆られ」（6・八五頁）て基礎から臨床に移る、勘に頼らず、「どんな場合でも、検査は出来る限り綿密にやり、その上で間違いない診断をした」（6・八三頁）という信念を貫こうとする、また、アルバイトはせず、持ち家も望まずに「法円坂の住宅公団アパート」（6・八八頁）での質素な生活に甘んじ、「生物学的反応による癌の診断法」（6・八六頁）の研究に没頭するなど里見の学究派的行動は、学者として、医師としての生き方の範を考えさせる存在として作中では描かれているのである。また、財前誤診の医事裁判では「今度のことはどうしても許

せない」(7・三三二頁)として真実の発言にこだわった結果、鶴飼によって山陰大学第二内科教授(7・四一四頁)に陥れられようとし、結局は「病理学教室の大河内教授の計らいで、近畿癌センターの第一診断部に籍をおき、消化器の診断を受け持つと同時に、早期胃癌診断の研究を続けられることに」(8・一一頁)辛うじてなる事実も、「自分の持つている学識と政治力のすべてを駆使し、どんな詭弁を弄そうと、どんな手段に訴えようと、絶対、誤診を認めてはならない」(8・二五一頁)といきり立ち、医局の頂点を死守しようとする財前とは趣を異にしている。佐枝子が叶わぬ恋心を里見に対して持つに至るということ、それはまた財前批判であると言えるが、意識せずとも父や同じく医学者だった祖父の背中を見て育った結果、あるべき医学者の理想像を彼女が反芻した結果の出来事であると読むことができる。

ところで、両者を見比べる東は、里見が医事裁判で真実の告白に傾倒していく様子に賛辞を惜しまないが、それも佐枝子から見れば、近畿労災病院院長という地位に納まった範囲内で傍観者のようにしか捉えていないからこそ軽はずみに言えることだとの手厳しい評価になってしまう。手を汚すことを嫌い、既得権に安住し、数ある医局員を手駒のように操った行為の特殊性を客観視できなかった東は世間的には成功者であるが、定年退官と前後して生じた人事を通して、敗れ

去っていく医師たちの人生が折り重なるように捨扶持となった結果、自らが存在し得たという事実を静かに凝視しているとも言えるのである。

八 東という暗喩

ここで、彼の苗字である東に込められた暗喩につき、解釈しておきたい。大阪という西を起点に見れば、東京は紛れもなく東である。東は東京という東、東都大学という東の拠点大学から西の拠点である浪速大学にやってきた人物である。彼の苗字は彼の浪速大学における立ち位置を象徴している。東が自己の後任人事候補者として、同じく東から船尾の引きで菊川を持ってこようとしたのは、同系繁殖を意図したものであったと言える。とするならば、助教授の財前以下、浪速大学の純血で固まった医局員とは亀裂が生じる事態が発生するのを食い止められないのである。第一外科のトップに異質の血が東に続いて入るとなれば、助教授以下医局員全員に教授昇格の道はない事実が突き付けられることになってしまう。よって、教授選が佳境に入った頃、医局員が金沢在住の菊川宅に押し寄せ、出馬取り下げを迫るのも、医局に他の血が混入することを嫌悪するあまりに生じた行為なのである。

東という呼称は、浪速大学における外様としての立場を暗黙のうちに知らしめるものである。だが、外様だから力量に

欠けるという意味ではない。逆に、意識し続けなければならぬ程のパワーを持って存在しているのである。首都・東京を起点に見れば、大阪は地方である。うっかりしていると、強大な首都圏からの勢力の波に飲み込まれてしまいかねない危うさをも内包しているのである。

教授としての東は、浪速大学内で鶴飼学部長にうまく取り入り、定年まで泳いできた狡猾な人物として造型されているが、彼のバックボーンには東都大学という日本の中心に君臨する大勢力が控えている様子に気づかせる装置として、その苗字は機能するはずなのである。

九 おわりに

では、このような作品の分析に際して、当時の社会状況を考慮すると、どのような知見を重ね合わせられようか。

まず、癌が当時、死に至る病であり、日本人の死因として最も大きな割合を占めていた事実を掲げれば、その治療を仕事とする東や財前、ひいては浪速大学第一外科の権威がいかにほどに大きなものであったかがうかがえるはずである。また、浪速大学出身者が、徳島大学、奈良大学、和歌山大学、大阪医科大学などに教授として供給されていたという記述からは、浪速大学が系列下に置く大学を幾つも持ち、相当数の研究者養成を成し得てきた名門大学であることも分かるのである。

る。

東本人も妻の政子も、定年後の天下り先の確保に躍起となり、原文部次官や池沢医系議員などの政治家のつてを頼ろうとする様子も相まって手段を選ばない（7二四頁）が、「何もかも、人と人との繋がりによって動き、それが実力よりも大きな働きをする不条理な世の中だと、不快になりながらも、なお原に頼らねばならぬかと思うと、東は今さらながら、国立大学の教授といつても、現職であつてこそその教授で、定年退官を迎える教授の力の無さを感じた」（6一九〇～一九一頁）のであった。ここからは当時、代議士などの政治関係者が病院のトップ人事に影響力を持ちえたこともうかがえる訳で、そのような視点からの分析も有効である事実が描かれている。

『白い巨塔』からは発表当時の大学病院をめぐる様子が如実に見てとれるが、読者はあまり知識のなかった教授を頂点とする医局の人間模様には大きな興味をそそられるはずである。けれども、縦社会の人間関係は組織の至る所に観察される訳であり、読者はそれぞれが所属する場における状況に照らしてこの物語を読んだが故に、作品はベストセラーとなったものと考えられる。ならば、学閥や組織に支配される人間の生きざまに思いを馳せながら、作品を俯瞰する努力も必要となるであろう。その上で、学閥の頂点である教授の地

位に去り難い執着を見せ続ける東の心中に思いを馳せることが求められてくるはずなのである。同時に、教授人事をめぐって権謀術数が張り巡らされる様子を描いた『白い巨塔』が財前を中心に読まれがちであるのは当然であるが、財前に立ちほだかる東の動きに注視してみると、利権を手放したがない人間の性が興味深い形で前面に浮上してくるのである。

付記

本文の引用は、『山崎豊子全集6 白い巨塔(一)』(新潮社二〇〇四年六月)、『山崎豊子全集7 白い巨塔(二)』(新潮社二〇〇四年七月)、『山崎豊子全集8 白い巨塔(三)』(新潮社二〇〇四年八月)によったが、ルビは省略している。なお、引用末尾にある数字は、全集の巻数と頁数を指したものである。

注

- 1 前川文夫『山崎豊子への誘い』(白地社 二〇〇五年五月 七八頁)

- 2 山崎は、「たまたま、この小説の舞台が大阪であったことから、

小説に登場している浪速大学医学部は、阪大医学部をモデルにしたものだととり沙汰され、以後、阪大では純粹に医学的な取材さえ、絶対、出来なくなり、大阪近県の大学で、阪大の系列下にない大学、或いは内容によつては、東京の大学で取材しなければならぬことになった」(山崎豊子『白い巨塔』を書き終えて)、初出は「サンデー毎日」一九六五年六月二〇日号、引用は山崎豊子『山崎豊子 自作を語る 作品論 作家の使命私の戦後』新潮社 二〇一二年一月 一五〇頁)と回想している。また、国立がんセンター総長だった久留勝が山崎の秘書だった野上孝子に「堂島川沿いにある浪速大学という設定に、私も当初、阪大がモデルかと思いましたよ、阪大の連中が、うちがモデルだ、怪しからんと騒いで、文部省へ掲載取り消しに動いたのも、「理ある」(野上孝子『山崎豊子先生の素顔』文藝春秋二〇一五年八月 五八頁)と語った事実なども、同時代の医学界の受け止め方を物語っている。

笠井哲「医療倫理」から見た『白い巨塔』の意義について」(『福島工業高等専門学校研究紀要』第四八号 福島工業高等専門学校 二〇〇八年二月 六五頁)は、『白い巨塔』の医師たちは、上から下まで医局に翻弄されている」と解釈する。

徳永光展「財前五郎・野望の根源をめぐって——山崎豊子『白い巨塔』論——」(『厦門大学外文学院日語系・厦門大学日本語教育研究中心編『東アジアと日本学』厦門大学出版社 二〇一三年八月 三〇一頁)は、「東は自己の業績を家庭内で誇ることを通してこそ、自らの存在意義を実感できる類の人物として描かれている」としている。

中川智寛「山崎豊子『白い巨塔』論——学閥・倫理観・都市の表象——」(『国語国文学』第五七号 福井大学言語文化学会 二〇一八年三月 五〇頁) は、佐枝子が「学閥を否定する力学」を発動させる存在として描かれているとしている。

徳永光展「正義を貫く姿勢——山崎豊子『白い巨塔』の悲劇性——」(李東哲・安勇花編『日本語言文化研究 第三輯 下』延迎大学出版社 二〇一四年六月 八〇八〜八〇九頁) は「尊大な財前」の様子に言及する。また、大澤真幸『山崎豊子と〈男〉たち』(新潮社 二〇一七年五月 八八頁) も「財前が『悪』に特化していた」存在であるとしている。

財前は始終悪役として描かれるが、里見にはその正反対の性格が与えられる。王敏東「戦後日本の医療映画・ドラマに見られる医者像の概観」(『日本医史学雑誌』第五九巻第一号 日本医史学会 二〇一三年三月 六六頁) は、医療ドラマの主人公となった医者性格を「医療(や社会)における不合理に不満を持ち、ヒーロー的で『正義の味方』である」と傾向づけている。『白い巨塔』では、里見は最後まで財前に対比される存在として登場するが、そのような立場は医療ドラマというジャンルにおいては必出の人物造型であると言えよう。